

5月学習会のご案内

平成25年4月30日

岡山 小学校の国語を語る会 祝200回

もうすぐ5月ですね。やっと寒さが本当に和らいだというのが実感です。先週は家庭訪問期間中にもかかわらずやや体調不良に悩まされてしまい、改めて日頃の健康管理の必要性を感じさせられています。

さて、語る会は今回で200回を迎えます。およそ17年の長きに渡り続いてきた会なのだと改めて背筋の伸びる思いがします。多くの岡山の先生方が関わってきたこの会です。200回という区切りにあたり、8月16日（金）岡山大学教育学部附属小学校にて記念講座を設ける予定です。内容については、これから詳細を詰めていく予定ですが、この会で実践研究を重ねてきた「丸ごと読み」と「おもしろ見つけ」に関しての実践発表や研究報告となる予定です。

そこで、次回の語る会では、その記念講座での発表内容の検討を行っていただければと考えています。とはいえ、内容については、変更になる可能性もあります。ご了承下さい。みなさん、ぜひいらして下さい。

日時	平成25年5月11日（土）9：30～12：00
場所	岡山大学教育学部附属小学校 2階 会議室 TEL(086)272-0511 FAX(086)271-3455
連絡先	小出 真規（こいで まさき）TEL090-5704-7339 m-koide@okayama-u.ac.jp（学校パソコン）
内容	国語を語る会 200回記念国語講座（仮称）へ向けての 提案検討

<お知らせ>

※「おもしろ見つけ」の本を、附属小でお取り扱いしております！来られ前に冊数をご連絡ください。代金引換となります。（特価！）多くの方に手にとっていただけるように、みなさん！宣伝活動をがんばりましょう！



- ※ 今年度の**年会費2,000円**を集めます。まだ納めて頂いていない方はよろしくをお願いします。（やめられたり休会される場合も一声かけてくださるとありがたいです。）
- ※ 異動情報をお待ちしております。特にこの封筒が前の勤務先に届いておられる先生は何らかの方法でご連絡ください。訂正してお届けいたします。
- ※ 駐車場は北門（幼稚園）からの入場になります。
- ※ 校舎扉前には案内の黒板が出ています。ご確認の上、中にお入りください。（扉が閉まっていたら、上記の小出の携帯電話に連絡をください！）

また、話題は変わりますが、6月8日（土）には、附属小学校の実践発表会もあります。今年度より実践発表会は6月と2月の年2回でそれぞれ半日開催となりました。第1回の今回は小野先生が「書くこと」の授業を公開されます。次ページに案内を掲載しますので、ぜひご参加ください。お待ちしております。

岡山大学教育学部附属小学校教育実践発表会
平成25年6月8日（土） 9:00～12:30

時程	公開授業	指導助言者・司会者
8:30～ 9:00	受付	指導助言 ノートルダム清心女子大学 人間生活学部児童学科 准教授 赤木 雅宣先生 岡山市立横井小学校 教諭 近藤 昌子先生
1時間目 9:00～ 9:45	公開授業①（国語科はなし）	
2時間目 10:00～ 10:45	公開授業② 6年い組（3階） 小野 桂 「ようこそ、わたしたちの町へ」（光村図書6年） ～5つの言語意識を明確にした書くことの授業～	
11:00～ 12:30	教科別研究協議会	

4月の学習会の報告

（文責 小出真規）

年度初めの会ということで、先生方の近況報告ならびに、鳥越 保行先生（倉敷市立箭田小学校）に昨年度後半にこの会で取り上げた「天気を予想する」（光村図書5年）の授業実践構想を発表していただき検討を行いました。

田中先生より

○附属学園幼小中の一貫研究について

全国では失敗事例が相次いでいる。

本学園でも、大学、中学校、小学校の連携に苦労している。

ただし、昨日の会（カリキュラム検討委員会）は楽しかったのではないかな。

実践研究といったものは、楽しくないと続かない。

一貫教育のモデルといったものが出来ても、全国の様々な学校に同じモデルが通用するとは思えない。附属学校園と公立の学校とは、状況や環境や学校規模、地域性が違うはず。

提案できるのは、幼小中がその地域でどのように相談しながら教育情報を伝達し合っているか、あるいは、子どもたちの育ちの方向性を共通の目標として共有していくにはどんな組織でやっていったらうまくいくのかといったことが提案の内容になる。

大筋のところでの言語使用や文学受容に関する共通理解はなくてはいけない。それぞれの学校種での教育がそれぞれ終わってはいけない。大筋のところでの目標共有はできていないといけない。

その点において、本校園の一貫教育は、発達段階ごとにおける「ことばの学び」を表したステージマップという形で提案ができています。しかし、それを精緻化していくというのは、外れの研究となってしまうのではないかな。

昨日の会は、それぞれの学校で取り組んでいるカリキュラムがどこでつながるかという会であったはず。それは、楽しくできるのではないかな。

小中の接続は、ゆるやかな坂というより、学級担任から教科指導別に変わっていく段階で、それはチャンス。ギャップがあることをプラスにする取り組みをしていかないといけない。小と中はち

がうんだということ。それを認識して変わっていく子どもであって欲しい。
岡山市の地域協働学校にも通ずる考え方を提案できればと考えている。

小野先生より

一貫教育のカリキュラムを考える部会に参加。

小学校の先生にとっては、カリキュラムと同じものを思い浮かべることができるが、中学校、幼稚園の先生はそれぞれ違うものを思い浮かべる。ねらっている子ども像は同じ。だけど、昨年度は、ステージマップやカリキュラムはばらばらでいいんじゃないだった。

今回の話では、3つの視点で全ての教育を見ていきましょうという点で、幼小中が合わせられそうな内容になってきた。具体的な子ども像はつながっているということも明らかになってきた。

例えば幼稚園での釘を打つ活動は、小学校の図工、中学校の美術の中の一部につながっていているというようなこと。やっとながりの一致点が見えてきた会だった。

田中先生より

会議をした部屋の黒板に検討した後がある。一緒に作っている感があっていい。楽しかったのではないのか。全面否定か全面肯定はおもしろくない。授業でも、自分の中にイメージ（考え）をもつ段階での交流を大切にしていけることが注目されている。

小川先生より

接続期は短い方がよい。ギャップは大きすぎたらいけないけど、ないのは問題。ギャップをどのように飛び越せて本物にするか。子どもを背伸びさせて、5月の終わりにはそれが本物になるようにすべき。ギャップをどう設定してやるかということが大切。

おはようございます。にどんな言葉を返しますか。返す言葉が10種類あるか。そこを増やす。

「上手に返事が返せたね。」

「目を見て返せたね。」

「大きな声で返せたね。」

「今のあいさつで校長先生、元気をもらいました。」

先にあいさつされると「校長先生、あいさつ負けちゃった。」

これを10種類に増やそうとがんばっている。

どう返すかのアンテナをもっていないと1年間あいさつは変わらない。これは担任の仕事。子どもが引き上がるようにしていけないといけない。

今の時期に、担任として何をするか。

えんぴつの持ち方。今指導せずにいつ指導するのか。姿勢、持ち方を全員、チェック。そして褒める。授業しよう授業しようと思えばばかり思うと、基盤が弱いまま1年が過ぎていく。今は基盤を鍛える時期。

雨が降ったときのかさ置き場の指導も大切。きちんとかさを入れられていたら、「何でそんなに上手にいられるの」たかがかさ置き場だけ、きちんと教えられることが存在している。

これから朝のあいさつをしますの前に何をするか。ロッカーを見るようにする。朝の会を早くしようとする前に、ロッカーの様子を見て子どもに返すことで指導していく。今のこの時期は1年間の基盤をボディブローのようにしていく時期。

赤木先生より

(学級の)スタートのところが大切。学習規律の浸透を第一教材の中で時間を使って行っていく。挙手、発表、立って発表するのか、座ったままか、いすを入れるのか、どのような考えでどのように指導していくのか。最初にたくさん決めごとを言われると子どもはしんどい。一つ一つできたことを確認していく。発表の仕方、ノートの取り方、ワークシートの書き方など。できない人がいるのは当たり前、できる人を増やしていく、注意してやらせるというのではなくて、できる人を増やしていくという発想で学習規律を浸透させていく。1時間にいろんなことを詰め込むのではなくて、

第一教材が終わる頃には、音読の仕方であったり、ノートの書き方であったり、発表の仕方であったりがだいたい決まってくる。それがいくつか教材を重ねてくるうちに、最初はきちんと発表することが大事でも途中からテンポを優先した発表の仕方に変えていくということも考えられる。

大学では、高等学校から入られた先生と小学校から入られた先生とは考えが違うと思わされる。高校出身の先生は、学生に対して適切な負荷をかけると伸びるという考え。小学校出身者は、どうやったら子どもが意欲をもってがんばれるか、ということを考える。近いようで根本のところが違うと思わされる。

田中先生より

校長講話であいさつを取り上げる予定

附属幼稚園の入園式

「おめでとうございます」に対してどういったか。

「おめでとうございます」おうむ返しで返答。

あいさつとは、そういうところから始まる。

中学生は、違う言葉で返して欲しい。自分の状況や相手認識をもって返せるようになって欲しいという話をしていく予定

●各先生方の自己紹介 (省略)

●鳥越先生の発表

「天気を予想する」の教材分析と単元構想

(概略)

単元構想に関しての主張点

- ・筆者の主張から疑問や納得をもって吟味しながら読む

筆者の主張部分「『今、ここ』で天気の変化を予想し、次の行動の判断をするのはそれぞれの場所にいる一人一人なのです。」(だから)「自分でも天気に関する知識をもち、自身で空を見、風を感じることを大切にしましたものです。」から、子どもが納得か疑問(批判)かの立場を取り、その根拠を探りながら読み進めていくことで、筆者の意図や工夫に気付くことができたり、主体的な評価をしながら読もうとする態度を育てたりすることができる。

- ・逆説の論を読む

まとまりのつながりが逆説であり、読者の思いを切り返す展開が意外性をもって読者を引きつけることになっている説明の仕方の効果を考えることができる展開を構想。

質疑

(三宅先生)

主張だけ見て、いいか悪いか子どもは判断しかねるのではないか。

単元の流れとしては、教科書の例では、資料をもとに書くという言語活動が設定されていたはず。筆者の書き方のよさをもって次の活動に向かえる単元構想を検討すべきではないか。

(磯野先生)

最後の主張を提示し、全体の妥当性や整合性を見極めていく。そして、主張がいいかどうか吟味していくという授業の流れ。表やグラフとそこにある文章との整合性には疑問はあるが、その疑問をもとに筆者の主張を吟味するということには、飛躍があるのではないか。

(鳥越先生)

こういった分析をしてこういった力を子どもに付けるとするとこんな構想が可能なのではないか、という提案。

批判するということは「いけない」とつっぱねることではなくて、論の進め方のよさは当然と

らえる。データ不足や説明不足は筆者の主張と関係していない。筆者は最後の部分が言いたいのであって、その前の部分には重きを置いていない。書き方のよさはとらえつつ主張をどう読むか吟味するという3次の授業を考えている。

(小野先生)

題名から読む、第一段落から読むというのと同じように主張する部分から読むということについては提案性がある。

(田岡先生)

逆説の論の説明の中で使われている飛躍と削除は同じ意味なのか

論の削除があるものが逆説の論ととらえていいのか

子どもは論の展開のすばらしさをつかむということで、それは、文中に出てくる接続詞を押さえることでとらえると考えられているのか

(鳥越先生)

飛躍と削除は違う。飛躍は、説明不足。削除はしかし、しかし、しかし、という前の部分は頭の中で削除していくという逆説の論。ありの行列は順接の論。逆説の論というのは、否定否定と続いて最後に主張が来るといふ論の進め方。この教材は今まで出会ったことのない論の進め方で、子どもがこういうふうにも論を進めることができると感じることであればいいのではないのか。

どういった教え方がいいのかまではまだ検討できていないが、順接の論との違いを検討できればいいのではないのか。3つのまとまりは子どもには見えるはず。そのつなぎ方を子どもに考えさせたい。

田中先生より

鳥越先生の発表は問題点を全面に出した形でシャープに行われるので、入っていきにくいですが、いい方向の提案なのではないか。実際の授業になるとこんな難しいものにはならない。書かれているものと実際の授業とは違って来る。鳥越先生の大筋の提案を受け止めていくと多くのものを学べるのではないのか。森田信義先生に基づく実践には、うまくできていないことに目を向けていくことを第一にする傾向があるが、それは目指す方向ではない。

学習者の中に問いと答えの着眼点が入ってきて、主張に対して自分の見解をもつということは小学校の説明文を読む学習でいきたいところ。この文章は何について書かれており、筆者はどういう問題を解決しようとしていて、どういう結論になっているのか、その結論にたどり着くまでにどういう事実を入れているのか、そのことに対して読み手である私は、どういう評価をしようとするのかというセットは、見解を述べている説明文を読むときには、そういう観点をもって読みたいというゴールに向かってこの教材単独でアプローチするとしたら、どうすることができるのかという構想になっている。育てているものがあるという前提は外して考えている。そういうことで考えていくと、冒頭やタイトルから読みの構えを作っていくという取り組みとして位置付けることができる。今回の提案は、最後の部分に先生が目を向けさせている。そこに学習者が自ら目を向けて自分で読みの構えを作るところへ行けるようにしたい。その部分に目を向けていくことができることを育てないで、結論部分だけで、問題意識をもって学習が展開されていくということになるとちょっと問題がある。意図的に操作された形で意見が作られるということになってしまう。

もう一つは、「削除」という言葉が強すぎるということ。形式を入れて、内容を考えるという取り組みはある。前の部分が否定されるというのは、全面否定と部分否定がある。全面は削除で妥当。でも、ここは部分否定。だから、削除という言葉を使うと抵抗感が強くなる。もう一つは題名のところ。天気をの前にどのようがくるのではないのか。「何を」は「天気を予想する」に相当する。ここは修正点。

この主張を丸ごと読みというのは無理がある。トップダウンというのは合っているが、提案内

容は受け入れられるが、丸ごと読みという形での提案は受け入れられにくいのではないかと。大筋では価値のある提案をして頂いた。

小川先生より

2次の1時が勝負。問いと最後がずれている、というところに着目して、子どもは、筆者は途中で随分と考え方が動いていっているんじゃないかなととらえるのではないかと。2時のめあて「10段落との対応を考えて、全文を吟味しながら読もう」では、子どもは動かない。何を吟味するかが欲しい。〇〇を吟味しながら読もう。〇〇には内容が入ってくる。例えば変化を吟味するというのいいのではないかと。3時はその変化が納得できますかといったときに、予報精度や雲の様子などの資料をつなげていきながら、変化がよくわかる、いやわからないという読み方ができるのではないかと。それだと丸ごと読みという意味が出てくるが、そのイメージでいいかと。

田中先生より

鳥越先生の提案は丸ごと読みではない。トップダウンでは構想しているが、丸ごと読みということは考えていなかったのではないかと。変化という部分を読むというと丸ごと読みになっていくかもしれない。授業を実際にするとそのつながりの部分がもう一段階はっきりしてくるはず。構想自体は十分あり得るもの。丸ごと、おもしろが絶対ではないという話は今までもしてきた。トップダウン、ボトムアップという発想の仕方が使えるようになることは育てていきたい。丸ごととはトップダウン、おもしろはボトムアップとは言えるが、それは、包括されるものと包括するものの関係であり、トップダウンが丸ごと読み、ボトムアップがおもしろ見つけとはならない。

次回

8月16日に向けて、指導案、略案等の検討。